鉄砲洲神社　論語素読　解説

（平成 23 年 5 月 13 日）

述而第七

29　子曰く、仁 遠からんや。我 仁を欲すれば、斯に仁至る。

孔子が言うには、仁というものは本氣で欲すれば、すぐ目の前に表れるものだ。私が仁を欲すれば、すぐ目の前に仁というものが表れている。

これは孔子の最晩年の頃の科白です。孔子が言い続けたことは、仁は凄く遠くてなかなか手に入らないもの、仁に近いけれども仁ではないという科白ばかりでした。この頃になると、弟子たちに、青い鳥は本氣で欲すれば目の前に表れるものだ、本氣で欲すれば大丈夫だと言っています。ということは、お弟子さんたちがなかなか本氣ではないと感じるので、本氣になれば大丈夫だということを強調したのだと感じます。

先月、私は被災地を 1 週間ほどかけて回りました。太平洋岸のリアス式海岸を車で回って来ました。そこで感じたことは、この「仁を欲すれば、斯に仁至る」という部分、本氣で理想郷を求めれば大丈夫だということです。津波が襲ってきても、津波に負けない土地・家作りを本当に欲しているのであれば大丈夫なのだということを、目の当たりに見ました。

例えば石碑です。私が見たのは、「地震があったら、津波に用心せよ」という石碑でした。他にも「ここより下に家を建てるな」という石碑もあるそうです。現実にその石碑まで水が来たそうで、その石碑の下に建てられた家は皆、流されてしまったという記事がありました。

また普代村の堤防を見ましたが、津波の被害を受けないために本氣で理想の土地を求めて建てられたものだと感じました。「堤防は 15 メートル以上のものを作らなければならぬ」という古老の言い伝えを尊重し、当時の村長が周りの猛反対を押し切って 15 メートル以上の堤防を作ったのだそうです。そして見事に普代村の民家は一軒も流れないし、一人の死亡者も出ていないと聞いて、実際に見てみたのですがその通りでした。海から堤防までの間の漁港は津波にやられていましたが、村の中は大丈夫でした。本氣になった時の人間の強さというものは素晴らしいものがあるなと感じました。

30　陳の司敗 問う、昭公 礼を知れるかと。孔子曰く、礼を知れりと。孔子 退く。巫馬期を揖して、之を進めて曰く、吾 君子は党せずと聞けり。君子も亦党するか。君

呉に取り、同姓なるが為に、之を呉孟子と謂えり。君にして礼を知らば、孰か礼を知らざらんと。巫馬期 以て告ぐ。子曰く、丘 や 幸 なり。 苟 も 過 有れば、人 必 ず之を知ると。

陳という国の司法長官が孔子に対して、魯という国の昭公は礼を知っている人物か質問をしました。

孔子が「当然、礼儀儀作法を知っている人物です」と答えた。

孔子が退席した後で、孔子の弟子の巫馬期に会釈をして自分の近くに進ませて、「私は昔から、君子とはたとえ自分の身内あっても悪いことをした人間をかばうことはしないと聞いている。君子と云われる孔子も、他の人と同じように自分の身内をかばうのか。魯の昭公は呉の国から自分の夫人を迎えた。同姓同志は結婚しないものなのに、ごまかして呉孟子と言い換えている。こういう礼に外れたことをする昭公を孔子が礼を知っていると言うのであれば、世の中に礼を知らない人はいないだろう」と言った。昭公は礼儀知らずで、それをかばう孔子も礼儀知らずだと巫馬期に言ったわけです。

それを巫馬期が孔子に告げたところ、孔子が「私は幸せ者だ。私は間違えをすれば、誰かが私に過ちを告げてくれる。有難いことだ」とさらっと答えた。

孔子は知らないわけではないけれども、やはり同じ国の人間を礼儀知らずだと言いたくはない。昭公は色々な礼儀を知っているので、たまたまその一部分だけが礼儀知らずと言われるような部分だったので、かばったのでしょう。

孔子が「私は幸せ者だ」と言ったのは、面白い答え方をしたなと思います。今の日本の国会の状況を考えてみますと、菅さんは叩かれっぱなしだけれども、絶対に謝らない。「私が間違っていました。すみません」とは言いません。もし菅さんが「私の間違いを指摘してもらって有難い。ご指摘を大いに活かしましょう・・・」と言うようであれば、叩かれ方も受け取られ方も違うのではないかと思います。

菅さんの国会答弁で二つ、氣になるところがあります。一つは、絶対謝らない、ミスを認めないところです。もう一つは、色々な発言の中で、「何時までにこうします」という発言が非常に少ない。今回の震災で、仮設住宅についてもそうです。「何時までに用意します」という断言をしないで、「何時までに用意するように最大限の努力をします」という言い方です。枝野さんも同じで、「最大限」とか、「きちんと」とか「しっかり」といった形容詞が多い。断言をしていませんから、結果が出なくても追求はされないという発言です。そこらへんが菅さんが叩かれるところだと、この文章を見つつ感じます。

31　子(し)人(ひと)と歌(うた)いて善(よ)ければ、必(かなら)ず之(これ)を反(かえ)さしめて後(のち)に之(これ)に和(わ)す。

これをみると孔子は本当に歌が好きなのだと思います。

人の歌を聞いて良い歌だなと思ったら、必ず繰り返して歌ってもらい、その後自分も一緒に歌う。

歌が好きだということと同時に、人と親しくなる上で非常に効果があるものではないかと思います。ひと頃は歌声喫茶というものがあって、団塊の世代がそこでよく歌ったということを思い出しました。見知らぬ人と一緒に歌を歌うというのは、かなり仲良くなるものです。最近また歌声喫茶なるものが復活し始めているようでございます。

仲良くなりたいと思う人物がいたら、一緒に歌を歌うのも友好を深める手段の一つでしょう。詩吟であれば、仮に流派が違っても一緒に吟じてみるのも良いのではないかと感じました。